

曖昧な境界でつながる「ミックス」の名乗り

——マイノリティ・コミュニティの形成と家族的類似性——

Naming “Mix” to Connect at Ambiguous Boundary:
Formation and Family Resemblance of Minority Community

荒木 生

キーワード：ミックス, コミュニティ, アイデンティティ, 家族的類似性,
人種概念

This study focuses on people in Japan who identify themselves as “Mix” among those with multiracial, multiethnic, multicultural, or multilingual backgrounds to examine the significance of this identification and the formation of identity-based communities.

Chapter I discusses the existence of the racialized concepts of “Japanese” or “foreigner”, and how individuals with multiple backgrounds, who do not fit within the boundaries of such concepts, have been named “Mixed-blood” or “Ha-fu”.

Chapter II present interviews with three people who identify themselves as “Mix”.

In Chapter III, based on the narratives in the previous chapter, we analyze how “Mix” is used as an inclusive umbrella term that retains a deliberate ambiguity and how it is perceived as possessing the intention of solidarity. The results reveal that the “Mix” community is a group based on intersectionality of perceived familial similarities and with aspects of

opposition to racialized “typicality”.

The identification as a “Mix” of people from these complex backgrounds is an attempt to exercise the right to self-determination and to gain self-affirmation, and is a practice whereby the “Mix” builds solidarity under an umbrella term.

目次

はじめに

I 先行研究の検討

II 「ミックス」を名乗る

1 A氏

2 M氏

3 H氏

III 考察

1 境界を揺るがす「ミックス」

2 アンブレラタームとしての「ミックス」

3 コミュニティの家族的類似性

おわりに

はじめに

近年、多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ個人の存在について、注目が集まることが増えている。日本において、いわゆる「ハーフ」「混血」等と呼ばれてきた人々は、日本だけでなく世界的に増加している。筆者は、自らが人種・民族的マイノリティのコミュニティに属しているが、そうした中で、多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人たちの中で、一定の当事者によって「ミックス」というアイデンティティが積極的に名乗られていることを知った。

なぜ多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ個人が「ミックス」というアイデンティティを積極的に名乗るようになったのか。また、そう名乗ることでどのようなコミュニティに帰属しようとしているのか。その意味と意義について、「ミックス」当事者たちの語り、およびコミュニティ形成の実践を紹介するとともに、考察してみたい。

以下、Ⅰ章では、多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々がどのように名指され、社会的に位置付けられてきたのかを述べる。Ⅱ章では、「ミックス」という名乗りの出現と展開を、当事者たちのインタビューから紹介する。Ⅲ章では、当事者の語りをもとに、「ミックス」と名乗ることの意義と意味、「ミックス」のコミュニティの形成について分析する。「ミックス」という語が意図的な曖昧さを持つ言葉として機能していることが明らかになるであろう。

Ⅰ 先行研究の検討

本稿に関連する日本の先行研究として、まず「日本人」と「外国人」という人種の境界が存在することの指摘があげられる。この「日本人」と「外国人」の境界線を問う者として「混血」や「ハーフ」が社会から一方的に位置付けられてきたとされる [下地 2018 : 21-24]。

一般に日本人は、国籍・文化・血統の3つが「日本人」として一致して、はじめて「日本人」だとその人を認識し、この3つの変数を満たさない者を「外国人」とみなしているという指摘がなされている [鈴木 2018]。こうした「人種」の意味付けや言説は、偶発的に生じるのではなく、歴史において政治的なアクターの戦略の中で意図的に構築されてきた。この「人種」の意味づけを「人種化」と言い、関係性・社会的実践・集団に、人種的な意味づけを付与することを指している [Omi, Winant 2015]。つまり、人種概念は社会的に作り出され、用いられ、様々な影響を及ぼしてきたのである。

「日本人」という言葉もまた人種化された概念として機能している。日本の憲法・法律（国籍法）などで定義されている「日本国民」とは「日本国籍を

取得したもの」とされ、人種・民族的に単一のものとしての「日本国民」は定義されていないが、その一方で、上記の指摘のように社会では様々な指標から「日本人」が人種化されてきた。「日本人」の根拠として、外見（肌の色、髪質・髪色、目の色、体型、服装など）、名前、文化、環境、ルーツ、言語など様々な指標が時と場合によって持ち出される現状がある [矢吹 2017]。

こうした社会の中で、「日本人」の「典型」ではないとされる者たちもまた存在している。「日本人」の「典型」ではないとされる者は、「日本人」が人種化されているのと同様に、外見、名前、文化、環境、ルーツ、言語などの指標で「非日本人」化あるいは「外国人」化されている。「日本人」の「典型」とされる像は歴史的に複雑に変化してきたが、「典型」が存在し維持される以上、非「典型」とされるマイノリティは排除や差別を経験し続ける [相川 2023]。日本において多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ個人が、完全に「日本人」として認識されることを望んでいた、あるいは望んでいなかったりすることは、対照的でありながらも同じ問題、つまり「日本人」の「典型」が非常に狭いことに由来している [Sato 2023]。

多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々は、日本において歴史的に、一方的に他者として名指されてきた [下地 2018]。第二次世界大戦後、社会問題として「混血児」が注目され、以降、「混血」は敗戦と恥辱の象徴、あるいは憧れや羨望のイメージとして消費されてきた。また、1970年代に入るとメディアによって「ハーフ」が取り上げられ始める。1990年代になると、「混血」や「ハーフ」に変わり「国際児」「ダブル」という言葉を用いる社会運動が展開され、2000年代後半には「ハーフ」のアイデンティティ・ポリティクスが草の根レベルで展開され始めたとされる [下地 2018]。多様な人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々への一方的な人種化のプロセスは、実に複雑であり、歴史的に絶えず変化している。

日本において、多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々を指す呼称が多種多様に存在し、その呼称に対する当事者たちの

受け止め方もまた一様ではなく、すべての人が満足する日本語が一つとして存在しないことは指摘されている [竹沢 2016]。しかし、その中でも当事者はときにラベルを引き受け、あるいは拒否し、自身が何者であるのかを語ってきた。

非「典型」とされる多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ個人をめぐる近年の研究には、多人種的アイデンティティを持つ者の経験と、運動が社会をどのように変化させているのか分析した研究 [DaCosta 2020]、多人種的アイデンティティの表現について社会やメディアの影響を分析した研究 [有賀 2023]、「ハーフ」や「混血」と呼ばれる人々の生活史を追った研究 [下地 2018] などがあり、近年盛んに研究史が蓄積されている。

しかしながら、近年、「ミックス」を名乗る当事者が増加していることや、その名乗りの社会的・文化的な意味を検討した研究は、まだ少ない。そこで本稿は、人種概念の一つの過渡期を迎えつつある現在、日本において確かに「ミックス」を名乗る人々が存在し、「ミックス」のコミュニティを形成していることを改めて紹介し、その名乗りの実践の意義を検討し、コミュニティがどのような場として形成されているのか分析する。

II 「ミックス」を名乗る

筆者は、「ミックス」というアイデンティティを引き受け名乗る「ミックス」当事者の方にインタビューを行った。なお、当然であるがインタビューは公表の許可を得ている。また、本稿で述べる「ミックス」コミュニティには属性を公表していない人物も含まれるため、個人および団体の特定を防ぐため、それらを仮名で表記する措置を取っている。

また、インタビューによる自分たちの思考や実践を可能なかぎり克明に書き残してほしいと要望があったことや、話題の展開がわかりやすいことを理由に、インタビュー形式での記述とする。

「ミックス」とは、人種・国籍・文化・環境・言語などの様々な背景／要

素／特性を持つことを指す、非常に広義の語かつアイデンティティであり、以下のインタビューに登場する当事者たちだけでなく、多様な当事者によって名乗られているということを予め述べておきたい。

1 A氏

20代、女性。日本国籍。母方祖父が中国人であり、血縁関係はないが父方祖母が元・朝鮮国籍（帰化済み）。幼少期はアメリカで暮らした経験がある。日本と中国、韓国、アメリカなど複数の国や文化の中で育ち、人種的・民族的・文化的ルーツが複数ある。

——なぜ「ミックス」を名乗るのか？

A氏：私は、国籍は日本、人種的には黄色人種／東アジア人で、民族的には何と表せるかわからない。ミックス・レイスであり、ミックス・エスニシティであり、ミックス・ルーツでもあり、あるいはミックス・ランゲージと言えるかも知れないとっていて、だから自分は「ミックス」であると名乗るようになった。

——「ミックス」が一番自分を形容できる語だと思うか？

A氏：時と場合によとも思う。自分のことを中国系日本人と言ったり、華裔であると言ったりすることもある。でも、日本人であることや、中国系日本人であること、華裔であることは、私の抱えるルーツやカルチャーの一面でしかない。私には日本、中国、韓国、アメリカによって培われた部分が存在していて、それは「ミックス」と名乗ることでしか表現できないと感じている。

——「ミックス」のコミュニティに属する理由は？

A氏：当事者同士で集まって話せる場所が必要だと思ったから。複数人で集まり、みんな「ミックス」で、自分が一人ではないと感じられる経験をしてみたかった。私は外見は東アジア系なので、外国ルーツがあると見做

されず「日本人」に埋没可能だけど、人によっては外見で「外国人」と見做される人もいて、そういった違いはあれど仲間として繋がれる場があることは大きいと思っている。

——「ミックス」というアイデンティティについて、他に思っていることがあれば是非。

A氏：「日本人」や「外国人」、あるいは「在日コリアン」や「華僑」も包括することができる、曖昧で広義な言葉であることが「ミックス」の良さだと思っている。細分化されたアイデンティティと同じくらい、包括的なアイデンティティは個人の心理的にも社会的にも大切な機能を果たすと思っている。

2 M氏

M氏は、30代の女性、生まれ育ちは日本の千葉県である。ポーランド系日本人である。父の仕事の都合で小学生の頃の2年間ヨルダンに住んでいた以外は、日本の学校に「ずっと通っていた」という。

M氏の第一言語は日本語である。ポーランド語は母と話していたので馴染みがあるが、読み書きは英語の方が得意であり、英語とポーランド語は「どちらも中級」である。

——なぜ「ミックス」と名乗るのですか？

M氏：基本的に自分をどう名乗るかは人それぞれなんですけど、勝手に周りから決められる違和感が大きくて。私の場合は世間的に一番言われるのは「ハーフ」で、でもそれは自分が選んだわけじゃない。便宜上、私も「ハーフ」と使うこともあるけど、よく言われる話ですけど「半分」というイメージを持つ人も多いし、外から付けられたもの、そういう感じがしていて。似た境遇や背景の人たちと出会う中で、みんな「括れないな」というのがわかってきたんです。単純化されたわかりやすさを、あやふやにして、それでも連帯したいという思いが深まったので「ミックス」。

——「ミックス」を名乗ることを選んだんですね。

M氏：血が混ざってという、雑種みたいなモノみたいな印象を最初「ミックス」に抱いたこともあるけど、たとえば「クィア」¹⁾みたいに、元々は蔑称みたいな言葉でも、「ミックス」なら逆に、逆手にとって連帯として使えるんじゃないかと思うようになった。

——「連帯」という言葉が出てきましたが、「ミックス」は連帯を意識したアイデンティティなんですね。

M氏：私自身もそうなんですけど、「ミックス」の人は、結局たぶん本当に一番自分にじっくりくるアイデンティティとか、これだ！ってものは、無い気がしてて。コミュニティに属すっていう意味で、一つのラベルを選ぶことはあると思うし、それに救われる色々なものと人もあると思うけど。いわゆる「ミックス」の人は家庭環境も複雑だったりするので、自分のルーツとの距離感もそれぞれだったりするので、「ミックス」なら、その辺はどんなミックスされ方でもみんな受容できるかなと。「日本人じゃない」みたいに弾き出されるマイノリティとして、在日コリアンや華人とも連帯したいし、仲間なんじゃないかって。在日何世と言われる人も、「ハーフ」と呼ばれる私みたいな人も、重なって集まれるような。マイノリティへのヘイトがある中で、お互いのグループはここまでだよ、と分けてる場合じゃないと感じています。ミックスというのは幅もあるし曖昧さもあるし、その中で変化もできるし、言葉としての器の大きさみたいなのは本当にいいと思う。私は「ミックス」と名乗りたいです。日本だと「ミックス」は、「ハーフ」と「ダブル」の新しい版みたいな思われ方をしてるけど、「ミックス」はもっと広い。そういう定義も壊していきたい。包括するという点がポイントで、同じというわけでは無いし、同じ経験だよなって同化しあったり矮小化したり均一にしていくことなく。

——定義への異議申し立ての側面もある。

M氏：「ハーフ」の方がこの風潮は強いと思うんですけど、「ミックス」と

いうと、極論、肌の色が違う人同士の間に生まれた子供しか含めないみたいなものがあるんですよね。これは本当に自分でも今考えると恥ずかしくて情け無いと思うんですけど、実際私も、大学の一年生のときの、新歓のときに、日韓にルーツのある子に「私もハーフだよ」って言われて、あっ！ そっか！（そういう「ハーフ」の人もいるんだ）って思ったことがあって。まわりが「ハーフ」はこういうものだ、ああいうものだって溢れてて、それを私自身も内面化してたのがありますね。その子にそういわれてビックリしたので、ビックリした自分がすごく嫌なんですけど、そういう反省も踏まえると。やっぱりこう、「ミックス」っていう言葉がいいなと思うのは、どれくらい人種や国や言語や文化が混ざり合っているのかを曖昧にできる、そこを無視できるので、強い言葉だなんて思います。

——「ミックス」の交流会を開かれていますけど、そこで「ミックス」という言葉を選んだ意味はありますか？

M氏：日本以外にもルーツのある人たちの交流会を開きたいなと思って、そうすると「ハーフ」「ダブル」では集まらない人がいるから、広く日本以外にもルーツのある人を指して「ミックス」がいいかなって。それぞれの経験は、全然環境も境遇も違うんですけど、でも元となる海みたいなものは一緒だと感じることもあるので、憩いの場みたいなのを考えたときに、なんかこう、やっぱり。前に自分を取材されたとき、アメリカ育ちの日本人の方に共通点を感じて、最初はミックスルーツと言っていたけど、ルーツの話だけじゃなくて、文化や言語や住んでるところが複数ある人もいるので、もうルーツだけにしないでいいや！ と思って「ミックス」にしました。

——「ミックス」のコミュニティで重視していることはありますか？

M氏：やっぱり、「インターセクショナルリティ」²⁾ ですよ。はじめに会を開くときに一番考えたのが、みんながここは安心して安全に参加できるようになって思うことを大事にしたので。たとえば性的マイノリティだったり、

持病があったり、ADHD とかの特性とか障害とかあったり。話して聞いたのは、性的マイノリティのコミュニティで「外国人はちょっと」とか言われたとか、逆にハーフ会みたいなのに行ってみたけど自分の障害の話はできなかったとか。「ミックス」の人ってメンタルの状態が悪くなったり人間関係に悩んだり、孤立感を感じることを経験している人がどうしても多いので³⁾、そのまま集まれる安全な憩いの場が必要なんだなって思っていました。広義の「ミックス」の人たちが参加できる場を作ろうと思うと、それ以外のマイノリティ性も必ず考慮することになるんだなって。他のマイノリティ性を考えることなく安心安全な憩いの場ってできないんだなと気づきました。こういう集まりに参加したいと思う人は、色んなアイデンティティに関して多少なりとも悩んだり、繋がりを持ちたいと思ったことのある人だと思うので。

——Mさんにとって「インターセクショナルリティ」が「ミックス」というアイデンティティの大きな部分を担っているんですね。

M氏：もともとこの交流会を始めようと思ったのは、私が社交不安、昔の言い方でいうと対人恐怖症なんですけど、交流会に参加して回復というか癒されたからなんです。当事者同士にしかわからないこともやっぱりあって、家族にわかってもらえないっていうのも「ミックス」あるあるで。さっきも言ってたんですけど、ミックスという人たちはメンタルの調子を崩しがちで、でもそれに対してメンタルの調子をよくしようとすると本人がカウンセリングしたり薬を飲んだり環境を変えたり、本人が努力しなくちゃいけなくて。だからと言って原因の社会を変えるエネルギーは途方もなくて。こういう自助会みたいな交流会だと、場としてワンクッションがあることで、仲間と顔見て生身の人間として話し合ったり刺激を受けあったりすることも大事だなと思っているんです。「ミックス」なのは同じだけど、どういう「ミックス」なのかはそれぞれ違うし、お互いいろんな属性と悩みがあるよねって、「インターセクショナルリティ」の意識がないと連帯できないので。

—「ミックス」というアイデンティティについて、他に思っていることがあれば是非。

M氏：もし、今後「ミックス」という言葉が残らなかったとしても、こういう思いで「ミックス」を名乗っていた人たちがいることは知られていてほしいです。

3 H氏

H氏は、20代の女性。性的マイノリティでもあり、セクシュアリティについては「クィア」または「パンセクシュアル」⁴⁾を名乗っている。

H氏の出身は大韓民国（本人は「サウス 코리아」と述べた）。高校卒業後、現在まで10年以上日本に住んでおり、日本で成人し、日本で就職をしている。韓国語と日本語のバイリンガルである。日本の永住権取得の資格を有しているが、現在申請はしていない。

—「ミックス」という名乗りについてどう思いますか？

H氏：ミックスって犬みたいじゃんって感じて、最初あんまり好きじゃなかったんですよ。ミックスは、個人的に、というか世間一般的に、両親の国籍とか人種とかが違うとか、そういうイメージが強いじゃないですか。でも日本で10年いて、自分って韓国人じゃないじゃん、とショックだったときがあって。自分を韓国人だと思ってたけど、でもアイデンティティが揺らいだときがあって、「ミックス」のアイデンティティがわかるようになって。

—アイデンティティの揺らぎとはどんな経験でしたか？

H氏：何年前に、本読もうと思って、韓国の韓国語の本を読んだのね。全然読めなくて。集中したらわかるんだけど、読んでても頭に入ってこないのよ。パートナーが編集者なんだけど、韓国語を添削してもらったら私の韓国語、もうめっちゃくちゃになってて、韓国語読めないし、書けないし、喋りも微妙になってるし。それで、国籍変えようと思った時期もあって、

不動産屋さんがマジでつらくて。ぶっちゃけ私は日本にずっと住んでて、普通に生活してて。だから物件見たくて。私かなり日本語ペラペラで、ね。訛りも方言くらいの感じだから。名前言うまで普通に喋ってて私が韓国人って気づかなかったのに、名前言ったら「えっ、外国人ですか？」って言われて、「外国人無理です」って。物件見せてもらえなくて。私ね、10代で来て日本で成人して日本で働いてるし。日本の常識とか価値観を持っているのよ。外国人は騒ぐから、みたいな、そんなの、国で括れる？ その後、コロナ禍⁵⁾になって、日本にずっと住むか悩むようになった。10年日本にいるんだけど、今まで経験したことなかった差別を受けたんだよね。コロナでみんなイライラしてそうなったのかわからないんだけど、韓国人が嫌いっばい人に、私のことなんにも知らないのに、国に帰れて連続して6回？ 8回？ くらい言われて。運悪すぎて、立て続けに。鬱になっちゃって。投票権もないし、差別もあるしで、どうしようかなって。で、コロナで止まっていた飛行機が回復したときに帰った韓国が、もう全然違ってて。10年ぶりに帰ったら韓国ぜんぜん変わってて。韓国は10年前だと50円だったお菓子が500円になってて。それくらい変わってるから、もうね、浦島太郎よ！ 韓国人にメール送るときも、相手に「日本語からの直訳ですか」って言われるくらい、言葉のベースが日本語になっちゃった。日本語がわかる人としか10年間話してなかったから、韓国人と話しても「それなに？ どういう意味？」って言われるようになって、自我が崩れました。

——アイデンティティ・クライシス⁶⁾の経験ですね。

H氏：それまで、日本人じゃないし、あくまで韓国人だと思ってただけ。それまで自分は韓国人だなーと思ってただけ、もはや混ざり切って、カルチャーも価値観も言葉も混ざり切って、私は何人?! うわー! あははは! わかんないね、もう。だから、思ったのが、私の友達に、両親が韓国人で本人は日本で生まれ育った子がいるんだけど、その子と(私は)近いんじゃないかなーってことを。その子は韓国籍で、韓国語ほとん

ど喋れないし、韓国に行ったことも一回とかしかないし、本人は自分を韓国語が喋れる日本人だと思ってるから、今は私もその子を日本人だと思うようになったんだけど。それまで私は「ミックス」とは言いたくなかったのね、あくまで私は韓国人と思ってたけど、人生の半分くらい日本にいるから、もう経験とか考え方とか日本と混ざってるなと思うようになった。認めるようになったよね。

——自分も「混ざって」いて、「ミックス」なんじゃないかと。

H氏：自分は国籍一つでいうと韓国人なんだけど、お父さんもお母さんも韓国人だし。でも、カルチャー的には、言葉的には、混ざってるから。そういう意味での「ミックス」が社会一般でもっと使われてたら、自分のこと「ミックス」って言ったかもねって。人も文化も混ざるのが当たり前かと思って。だから、私は「ミックス」そんなに好きな言葉じゃないんだけど、言葉が必要なのもわかるし、この言葉があることで集まれるっていうのも感じるから。私、クエアなんだけど、「ミックス」も「クエア」みたいになるかもしれないとは思った。

——包括的な連帯の言葉、ということでしょうか。

H氏：でも、「ミックス」っていう言葉がいらないのって思うこともある。混ざってるのを前提にしてほしいから。わざわざ言わなきゃならないのは何？ 韓国人も在日の人も日本にずっといるでしょ、混ざってる人はずっといるでしょ。人も文化も混ざるのが当たり前だったりするんだから、混ざってないもの、世の中にいるの？ なんでこっちが「ミックス」って名乗らなきゃダメなのって。でも、クエアが、差別に対して「はい私クエアですけど」って言い返したのと同じで、みんなで「はいミックスですけど」みたいな、それも良いかもなって。やっぱ言葉って国によって違うから、「雑種」みたいなイメージが強くなって使わなくなるかもしれないけど。

——「ミックス」というアイデンティティについて、他に思っていることがあれば是非。

H氏：私もカルチャーと言語が混ざり切ってるから、ミックスで一す！と言ってこうなって。「ミックス」を取り戻したいな、と、思うようになりました。日本でも、韓国に帰って「日本人じゃん」って言われたりしたときも。韓国と日本の、文化と言葉がね、混ざってる人としてね。

Ⅲ 考察

1 境界を揺るがす「ミックス」

前章の事例から、日本において多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々の中に、一定数「ミックス」と名乗る人々がいることが明らかになった。

また近年、メディアにおいて多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々を表象する際に「ミックス」の語が使用される例が散見され始め⁷⁾、研究においても「ミックス」に言及するものが増えている〔下地 2021：15-17〕。こうしたことから、「ミックス」と名乗る人々の数は増加しつつあることがわかる。

規範から一方的に非「典型」として振り分けられた呼称ではなく、マイノリティ当事者が自らを「どのような呼称で呼ぶのか、または呼ばないのかを、そのときどきで自分自身で決める権利」〔下地 2021〕、つまり「自己決定権」を行使し、引き受け選び取ったアイデンティティが「ミックス」であった人たちが存在していることが、Ⅱ章の当事者の語りから明らかになった。当事者による「ミックス」という名乗りは、他者化に抗い自己決定権を回復することから発した実践であるということも可能だろう。

「ミックス」の名乗りの実践は近年盛んに行われ始めた。前章で「ミックス」当事者自身が「曖昧な」語であると述べていたように、現在「ミックス」は意味の定まらない語として運用されている実態がある。この語の持つ「曖昧さ」がなぜ多様なバックグラウンドを持つ当事者によって選択・支持され

ているのかを考察する上で、筆者は、言語の意味と使用の関係を重視し、言語哲学および分析哲学に言語論的転回をもたらしたルートヴィヒ・ウィトゲンシュタイン（1889-1951）の提唱した「言語ゲーム」の考え方が有効だと考える。筆者は、この名乗りの実践を「ミックス」という語をめぐる言語ゲームとして捉えている。

言語ゲームとは、言語活動を共通のルールを共有する者同志のゲームとみなす考え方⁸⁾である。言葉の意味は先験的・固定的に確定しているのではなく、言葉は使われる文脈や目的に応じて変わるゲームのようなものと考えられる。従って、言語はそれ単体で意味が確定するものではなく、日常の中で言葉がやり取りされる中で、言語はその意味を確定していくのである〔ウィトゲンシュタイン 2020〕。つまり、言葉の意味は、使う状況を含めた使い方によって決まるのである。

社会から一方的に名指される他者化に抗い、規範的な「典型」の境界を揺さぶる語として「ミックス」は多様なバックグラウンドを持つ当事者たちによって名乗られ始めている。当事者のインタビューで「連帯」や「つながり」という言葉が使用されていることから、連帯しなければ「ミックス」のように多様なバックグラウンドを持つマイノリティは生活が困難だという背景が見えてくる。「ミックス」の名乗りは、自己肯定感の獲得という個人的な問題であると同時に、マイノリティの連帯という社会運動であるともいえよう。こうした実践により、「ミックス」という言葉は今まさに形作られている。そして、社会の言語ゲームに持ち込まれた「ミックス」という言葉は、規範的な共通のルール、つまり人種の「典型」を揺るがし拡張する可能性を持っている。

次項では、こうした現状を踏まえ、「ミックス」という言葉について、言語ゲームの観点からその「曖昧さ」の意義を読み解いていく。

2 アンブレラタームとしての「ミックス」

「ミックス」とは、多人種的な人を指す包括的な言葉であり、「日本人 or 外国人」や「東アジア人 or それ以外」などの二項対立、人種・民族・国籍・

文化に関する複雑かつ複数の人種化された境界を生きる者としての、ある種の連帯として機能する包括的なアイデンティティであることがⅡ章の当事者たちの語りから推察できる。

当事者たちは、アイデンティティを表す言葉は「人それぞれ」であることを強調している。なおかつ、当事者によって名乗られる「ミックス」は、人種概念の「典型」から排除された人全てを含み得る、包括的な意味が込められている広義の語であると語っている。

Ⅱ章で紹介したように、A氏は、「ミックス」というアイデンティティが「包括的」であり「違いはあれど仲間として繋がれる」ものであると述べた。M氏は、日本において「“日本人じゃない”みたいに弾き出される」マイノリティたちが、「それぞれの経験は、全然環境も境遇も違う」中で「お互いのグループはここまでだよ、と分ける」ことを拒否し「重なって集まれる」、「大きな器」として「ミックス」のアイデンティティを引き受け、選択し、名乗っていると述べた。さらに、H氏は、性的マイノリティ全体を広範的に包括する語である「クィア」を例に、「カルチャーと言語が混ざり切ってる」者として「ミックス」の語についても規範的な人種とルーツのみを指す用法から、包括的な語として「取り戻したい」と述べていた。

要するに、「ミックス」とは、自らが人種・民族・国籍・文化・言語・宗教などの様々な位相の人種的概念がミックスしている存在であることを指す言葉であり、それをアイデンティティとして引き受けた者によって、規範や「典型」に与しない連帯の指標として名乗られているのである。つまり、「ミックス」とは定義の困難な、ある種のアンブレラターム⁹⁾である。

このような、いくぶん広義で境界のはっきりしない語について、明確な境界のないものを人は特定の領域として呼び認識することはできず、従って曖昧な「ミックス」という言葉には当初の効果が期待できない、あるいは破綻しているという反論も予想される。しかし、不明瞭であるからこそ、効果を持つと筆者は考える。

ワイトゲンシュタインは曖昧で境界のはっきりしない言葉を「ピントのぼやけた写真」にたとえ、以下のように論述した。「ぼやけた写真をはっきりと

した写真で置き換えるのは、常に都合のよいことなのか？ 他ならぬばやけた写真を必要とすることが、しばしばあるのではないか？（中略）『大体この辺に立ってくれ！』というのは無意味なことなのか？」[ワイトゲンシュタイン 2020：79-80]と述べ、こうした境界の明確でないアンブレラタームの有意性を示し、その意義や意味を強調している。この例えで挙げられている「この辺」とは、境界のはっきりした領域を示している言葉ではないが、有意味であることは確かである。

だが、「ミックス」が何者なのかを規定しようとする圧力もまた存在する。M氏は「極論、肌の色が違う人同士の中に生まれた子どもしか含めないみたいなものがある」と述べ、H氏は「両親の国籍とか人種とかが違うとか、そういうイメージが強い」と述べていた。このように、「ミックス」を名乗る当事者を品評しようとする風潮が社会にあり、当事者はアイデンティティの否定というハラスメントを受ける可能性が高い状況にある。

誰が十分に「ミックス」なのかを定義することは、当事者による「ミックス」の名乗りが実に多様であることを見ても難しい。そして、「ミックス」の実践はそれを拒否している。「ミックス」が何者かを定義することは、人種概念において非「典型」の中に、さらに境界を引き新たな「典型」を作り出し、人種化を再生産することと同義である。

「ミックス」は広義であり、「どれくらい人種や国や言語や文化が混ざり合っているのかを曖昧にできる、そこを無視できる」からこそ、人種化されたカテゴリの「典型」から弾き出されたマイノリティ当事者の誰もを包括する。「ミックス」は、意図的な曖昧さを残して名乗られている包括的なアイデンティティであるといえる。それ故に、連帯の言葉として当事者に引き受けられている。「ミックス」という名乗りには、包括的な連帯の意思表示としての実践の側面があると考えられる。そして、その連帯の意思と実践は、「ミックス」がアンブレラタームとして機能することに結び付いている。

「ミックス」とは、狭い規範的な人種概念という社会のルールに対し、それを「拒否」するカウンター役割を持つ語としても使用されていた。「ミックス」は、定義の困難な、意図的に曖昧に使用されるアンブレラタームである

からこそ、規範を揺るがす効果が期待されているのである。

3 コミュニティの家族的類似性

境界のはっきりしない語でも明らかに意味を持つ場合があり、「ミックス」には、境界線のはっきりしないアンブレラタームであるからこそその働きがあった。

M氏の語りにあったように、「ミックス」のコミュニティで「インターセクショナリティ」が早くから重視されていたことは、「ミックス」というアンブレラタームの元集ったコミュニティが「家族的類似性」によって形成された場であることが一つの理由だと筆者は考えている。

家族的類似性とは、境界の曖昧な語の有意性を明らかにするためウイトゲンシュタインが名付けた、語の意味を部分的な共通性によって結びついた集合体とみなすアイデアである。

普通、或る一般名詞が指す対象のすべてに 共通な何かを探す傾向 [を、思考の探求を妨げる思い込みとして、我々は持つ]。例えば、すべてのゲームに共通なものがなければならない [という思い込み]。この共通な性質こそ、一般名詞「ゲーム」を様々なゲームに適用する根拠であると我々は考えやすい。しかしそうではなく、様々なゲームは一つの家族を形成しているのであり、その家族のメンバー達に家族的類似性があるのだ。家族の何人かは同じ鼻を、他の何人かは同じ眉を、また何人かは同じ歩き方をしている。そして、これらの類似性はダブっている
[ウイトゲンシュタイン 2010 : 43]

1つの本質的な共通点によってつながっていると考えられているものは、実際には一連の重複する類似点によってつながっている可能性があり、すべてのものには単一の共通点は存在しない、ということである。つまり、家族的類似性とは、特定のグループに所属する全ての個別の者に共通する特徴はなく、部分的に共通する特徴によって全体が緩くつながっている状態を指して

いる。

明確な境界のないコミュニティや組織はこの状態になっているのではないかと考えられ、「ミックス」のコミュニティにもそうした側面がある。

ウィトゲンシュタインの家族的類似を援用しつつ、共通の性質を持たずに構成されるものごとに着目した「多配列分類」(polythetic classification)では、明確な定義をもたない共通の集合、類似性を意識した分類を、それぞれの研究対象を多配列カテゴリと捉えることが、内部にあるいくつもの個体(これ自体も多配列的)の相互の類似性の解明だけでなく、「典型」が構築される仕組みの解明につながるとされている[Needham 1975]。明確な定義なき類似性による集合により、単配列的な「典型」の境界線をずらし、各カテゴリを捉えなおすことが可能になるのである[白川、久保、石森 2016]。

「ミックス」のコミュニティは、実に多様である。M氏が『「ミックス」なのは同じだけど、どういう『ミックス』なのかはそれぞれ違う』と語るように、「ミックス」のあり方は実質的に千差万別である。「ミックス」のコミュニティは、ある者とある者はルーツが同じ、ある者とある者は言語が同じ、またある者とある者は悩みが同じなど、部分的に共通するゆるやかな繋がりによって構成されている。そのため、もちろん、コミュニティ内には個々には全く共通点がない人たちも多数内包されている。

「ミックス」のコミュニティとは、家族的類似性により形成された場であり、単一性や本質主義を回避する多配列分類の場として実践されているといえる。「ミックス」のコミュニティは、参加者の意図に関わらず、コミュニティの存在自体が社会の規範的なカテゴリへの「異議申し立て」としての働き、あるいは規範的な人種化概念などの境界をゆるがす働きを持っているのである。同じく、個人が「ミックス」を名乗ることもまた、社会において人間の「典型」あるいは規範をずらす実践としての働きを持っている。

H氏が「私は何人?!」というアイデンティティ・クライシスを経験し、「混ざってるよねって、認めるようになった」として「ミックス」のアイデンティティを選び取る過程からは、韓国人か日本人かという二者択一の規範がずらされていることが読み取れる。そして、H氏が自分を「混ざってる人」

として認め発言するようになったこと及び、韓国籍の友人を相手のアイデンティティを尊重し「日本人と思うようになった」ことから、「ミックス」の名乗りが人種概念の「典型」への異議申し立てと同時に表出していることがわかる。

境界の曖昧な語をアイデンティティとして名乗ることは、規範に与しない立ち位置を引き受け、「典型」を疑う実践である。「典型」だけでは括れない者がここに存在しているのだという、境界線の揺らぎから規範側の「典型」をずらし拡張するものである。故に、そうしたコミュニティは「典型」という境界がずらされた場として形成される。

人種だけでなく階級・ジェンダー・セクシュアリティ・国籍・年齢・身体性など個々人の属性は多様に交差していること、「典型」ではないとされた属性が受け得る抑圧もまた個々人によって多様に交差していることがある程度前提とされていなければ、「典型」なきコミュニティは形成されない。アイデンティティとそれにより受ける抑圧を均一化し個別に境界を引くことへの異議申し立てなくして、曖昧な境界を引き受けた名乗りや、曖昧な境界に集う「典型」なきコミュニティの形成は起き難いといえる。

M氏が「広義のミックスの人たちが参加できる場を作ろうと思うと、それ以外のマイノリティ性も必ず考慮することになる」と述べているように、「ミックス」のコミュニティは、それぞれが多様な属性を持つことと、それと社会規範が交差することでそれぞれ多様な抑圧を受けていることを捉える「インターセクショナルリティ」の概念を重視し、連帯の場として実践されている。

おわりに

本稿では、日本における多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々の中で、近年「ミックス」と名乗る人々が存在し徐々に増えていることを紹介し、そのような名乗りの実践がどのような意義を持つのかを検討した。また、「ミックス」という名乗りを通して、どのようにコミュニティが形成されているのかを考察したものである。

I章では、多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々がこれまでどのように名指されてきたのかについて、「混血」や「ハーブ」の研究史から述べた。そして、近年そうした当事者たちが「ミックス」という名乗りを積極的、意図的に実践していることを紹介した。II章では、「ミックス」を名乗る当事者3名のインタビューを紹介した。III章では、前章の語りをもとに、「ミックス」が意図的な曖昧さを残した包括的なアンブレラタームとして使用され、連帯の意思をもってアイデンティティとして名乗られていることを分析した。そして、「ミックス」のコミュニティが、インターセクショナルリティに基づき、人種化された「典型」への異議申し立ての側面を持つ、家族的類似性からなる集団であることを明らかにした。

日本社会においても多人種／多民族／多文化／多言語など複数のバックボーンを持つ人々が増加している。そうした人々がどのようなアイデンティティを持ち、どのような実践を行い、コミュニティを形成しているのか、多角的に検討する研究がさらに必要となるだろう。

注

- 1) 「クィア (Queer) は、直訳するならば「奇妙な」「風変わりな」と言う意味の言葉であるが、差別を受け、社会的に排除されてきた性的マイノリティたちが、マジョリティを優遇する社会への反発と若干の皮肉を込めながら、自分たちを指し示す言葉として用いられてきた。この言葉の定義はさまざまであるが、一例として「社会規範に逆らうような、あるいは少しずつ転覆しええするようなジェンダーとセクシュアリティにまつわる表現・行為」(ウェルカー 二〇一九: 一一頁) という定義は、比較的理解しやすいものであろう [辻本 2023: i]
- 2) インターセクショナルリティ (交差性) とは、人種・階級・ジェンダー・セクシュアリティ・国籍・世代・身体性などのカテゴリが、それぞれ別個ではなく相互に関係することで起こる、差別や抑圧、あるいは特権を示す概念。個人の複数のアイデンティティが組み合わさることで起こる特有の差別構造を理解するための分析枠組み [コリンズ、ビルゲ 2021]。
- 3) マイノリティは「マイクロアグレッション」(特定の個人に対して属する集団を理由に貶めるメッセージを発するちょっとした日々のやりとりマイクロアグレッション) により、常にストレスに晒され、心身の健康を損ないやすいとされる [スー 2020: 401-426]。
- 4) パンセクシュアル (全性愛者／汎性愛者) とは、「あらゆるジェンダー・アイデンティティの人に惹かれる、あるいはジェンダーに関係なく魅力を感じる」性的指向 (セクシュアル・

オリエンテーション)である[荒木 2021]。

- 5) Covid-19 ウイルスの流行とパンデミックが始まった2020年春頃以降の、Covid-19の感染者が多い状況を指す。本稿執筆時の今なお「コロナ禍」であると捉えることができる。
- 6) アイデンティティの喪失。人や組織にとって、自己の存在意識や目標が見出せず心理的に不安定な状態に陥ること。
- 7) 「もともとこうした人たちは、『アイノコ』と呼ばれていたのが差別的だということで、『混血児』、その後『ハーフ』、今は『ダブル』『ミックス』ということばが使われるようになりました。時代の変化とともに呼び方は変化しましたが、彼ら彼女らが置かれた現状は変わっていません」

木下隆児「知ってほしい 私たちの本音」NHK生活情報、2019年09月02日。<https://www.nhk.or.jp/seikatsu-blog/800/411745.html> (2023/10/22 閲覧)

- 8) 「英語では「ゲーム game」と表現しているが、勝敗を決める場があるわけではない。ドイツ語の「言語 Spiel」は「言語の機動的なふるまい」といったニュアンスであり、こちらのほうが端的に理解される。たとえば、石材運びのゲームにおいて「角石」という言葉は「角石をもってこい」という意味であり、それ以外のゲームでは同じ「角石」という言葉がまったく別の意味(機能)を持ちうる。それは、トランプのジョーカーの意味がそれを用いて遊ぶゲームによって異なるのと同様である」[飯田 2002]。
- 9) アンブレラターム (umbrella term) とは、関連する幅広い範囲をカバーする単語またはフレーズ、包括的な総称。上位語 (hypernym)。性的マイノリティの権利運動において、互いに関連するアイデンティティを包括する際に使用されることが多い。本稿では「ミックス」が同じくマイノリティのアイデンティティであること、その権利運動と連帯の実践であるという類似性および、当事者の語りの中で性的マイノリティの権利運動への言及があったことから、広義の総称を指す言葉として本稿では「アンブレラターム」を採用している。

参考文献

DaCosta, Kimberly A.

2020, *Multiracial Categorization, Identity, and Policy in (Mixed) Racial Formations*, Annual Review of Sociology, No. 46: 19.1-19.19.

Needham, Rodney

1975, *Polythetic Classification: Convergence and Consequences*, Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland.

Omi, Michael & Winant, Howard

2015, *Racial formation in the United States: Third Edition*, Routledge.

Sato, Yuna

2023, *Navigating boundaries of Japanese-ness: identity options and constraints for 'invisible' multiethnic individuals in Japan*. *Asian Ethnicity*, Forthcoming 1-22, Oct 23, 2023.

相田真穂

2023, 『「単一民族観」の変遷 —新聞論説記事の分析をもとに—』、『年報 カルチュラル・スタディーズ』、11、97-117.

荒木生

2021, 『インターネット時代における性的マイノリティの『名乗り』と『名付け』: インターセクショナルリティと「ロマンティック」の観点から』、『常民文化』、44、1-27.

有賀ゆうアニス

2023, 『だれが「ハーフ」としてソーシャルメディア上で語るのか——動画共有サイト TikTok における「ハーフあるある」動画の探索的内容分析』、『メディア研究』、103、235-252.

飯田隆

2005, 『ワイトゲンシュタイン 言語の限界』、講談社.

ワイトゲンシュタイン, ルートヴィヒ

2010 (1958), 『青色本』、筑摩書房.

2020 (2009), 『哲学探求』、講談社.

コリンズ, パトリシア・ヒル, ビルゲ, スルマ著 小原理乃訳 下地ローレンス吉孝監訳

2021, 『インターセクショナルリティ』、人文書院.

下地ローレンス吉孝

2018, 『「混血」と「日本人」—ハーフ・ダブル・ミックスの社会史—』、青土社.

2021, 『「ハーフ」ってなんだろう?』、平凡社.

鈴木和子

2018, 『人種・民族的アイデンティティの再構築について』、『労働調査』、576、8、1-2.

スー, デラルド・ウィン

2020, 『日常生活に埋め込まれたマイクロアグレッション人種、ジェンダー、性的指向: マイノリティに向けられる無意識の差別』、明石書店.

白川千尋, 久保忠行, 石森大和編

2016, 『多配列思考の人類学 差異と類似を読み解く』、風響社.

竹沢泰子

2016, 『混血神話の解体と自分らしく生きる権利』、『人種神話を解体する3「血」の政治学を越えて』、東京大学出版会.

辻本侑生

2023、「はじめに クィアをめぐる人文学の状況」、『クィアの民俗学』、実生社。

矢吹康夫

2017、『私がアルビノについて調べ考えて書いた本 当事者から始める社会学』、生活書院。